

2019年度 嬉野市立吉田中学校 学校評価結果

1 学校教育目標 賢く 優しく たくましい 生徒の育成 ～地域とともに、9か年の学びをとおして～	2 本年度の重点目標 ① 地域とともにある学校づくり ② 確かな学力 ③ 豊かな心の教育 ④ 安全で安心な学校づくり ⑤ 業務改善・教職員の働き方改革の推進
--	---

達成度  
A: ほぼ達成できた  
B: 概ね達成できた  
C: やや不十分である  
D: 不十分である

① 地域とともにある学校づくり

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員の評価 (A～Dで記入)	意見や提言など
学校運営	●志を高める教育	「小中一貫教育」の推進	・小中連絡会を開催して、小中合同による学校行事などの工夫や改善を図る。 ・小中教員の相互乗り入れ授業や交流授業を継続し、小中の見通しをもち授業実践をすすめる。	・行事が活性化するように、打ち合わせ時間を計画的に設定する。 ・小中の教務主任の連携を密に、事前に計画を立てて相互乗り入れ授業の実践を工夫する。 ・行事の目的や目指す児童生徒像についての共通理解を図り、詳細な計画を立てる。	B	・小中連絡会は定期的に開催して、各行事に向けての打ち合わせや計画を立てることができた。 ・音楽や国語における小中交流授業や乗り入れ授業の実践はできたが、もっと多くの小中での交流を推進していく必要がある。	・4月の早い段階で、小中教務主任で相互乗り入れ授業の実践に向けて計画を立てる。 ・ブロック集会の開催についても年に3回は行い、事前に小中教員での打ち合わせの時間をとる。	B	
		つながりを大切に、郷土愛を育む「吉田学」等の推進	・総合的な学習「吉田学」のカリキュラムに基づく実践をし、カリキュラムをよりよいものにする。 ・地域と連携したボランティア活動への参加生徒数を全校生徒数の60%以上にする。 ・ESD(Education for Sustainable Development 持続可能な開発のための教育)を基盤とした国際交流・国際貢献を推進し、8月に外国教師との交流会をもつ。	・「吉田学」を実施する際に、地域人材を活用する。 ・地域から学ぶだけでなく、地域に還元する活動を取り入れる。 ・地域ボランティアに参加しやすいように、部活動等の配慮をする。 ・外国教師との交流会を通して、ESDについて理解を深める。	A	・吉田焼や嬉野茶など郷土の産業について学習する際に、地域の方々に協力していただいた。また、職場体験学習でも、地元の多くの事業所に受け入れていただいた。生徒は、地域の行事に、ボランティアとしても参加できた。 ・ドイツ野球のナショナルチームやオーストラリアの高校生が来日された際に交流できた。また、春に在の米国人やその友人たちとも交流し、ふるさと紹介を行った。	・今後も、地域の方に協力してもらうだけでなく、地域への還元も行うという視点を忘れずにカリキュラムを組んでいくことが大事だと思う。 ・国際交流・国際貢献は、今後も機会を捉えて継続して取り組んでいく。	A	・生徒の多くはたいへん素直だが、コミュニケーション能力が弱い。社交性を身に付けるためにも、地域だけでなく、他校の生徒や外国人などの交流は、今後も継続して行ってほしい。

② 確かな学力

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員の評価 (A～Dで記入)	意見や提言など
教育活動	●学力向上	「吉田メソッド」の深化	・「吉田メソッド」による深まりのある授業を展開する。 ・指導方法の工夫・改善に取り組むために、全教職員が1回は公開授業を行う。	・指導者が「①相手意識・目的意識をもった課題設定 ②思考を深める「考える」伝え合い ③視点を示した「ふり返り」を意図した授業を行う ・小中一貫カリキュラムを常に意図した授業づくりを行う。	B	・指導者が①②③を意識した授業を行ったかというアンケートでは、100%の実施率であるという結果であった。 ・全職員が「小中一貫カリキュラムに基づく9年間の系統的な学習指導を意図した授業づくり」を行っている。 ・ほぼすべての教職員が、小中のつながりを意識した指導案を作成し、その視点に立つて公開授業を行った。 ・学習状況調査の結果も良好であった。	・他教科や他校の授業研究会等の深い学びを目指した授業づくりの在り方については、研究を継続していく。 ・公開授業後の研究会を活性化させ、さらなる指導法改善を重ね学力の向上につなげていく。	A	・先生方には、学習面の指導でがんばってもらっているので、「A」でいいのではないかと。
		基礎・基本の定着を図る個別指導	・個のつまずきを把握し、TTを有効活用しながら個に応じた指導・支援を行う。 ・知識や技能を活用しながら課題解決する学習展開を工夫し、基礎・基本の定着を図る。 ・「木枯タイム(朝の小テスト)」を毎週木曜日に実施し、全校生徒の到達率の平均90%以上を目指す。 ・小中共通した「家庭学習強化週間」を年間3回実施し、家庭学習への取組の充実を図る。 ・全校生徒の自主ノート提出率の平均を90%以上にする。	・教師間の情報交換を密にして個の実態を把握し、適切に指導・支援ができるようにする。 ・教材プリントの作成に当たっては、活用力の向上を目指す内容を1問は取り入れるようにする。 ・昨年度に引き続き「振り返りシート」を活用し、取組内容の把握を徹底するとともに、生徒の学習意欲の向上に努める。 ・毎日、自主学習ノートの点検を行い、家庭学習の習慣化を図る。	A	・教師間の情報交換を密にして、個のつまずきを把握して適切に指導・支援できた。 ・「振り返りシート」を活用し、取組内容の把握を徹底、生徒の学習意欲の向上に努めた。 ・毎日、自主学習ノートの点検を行い、全校生徒の自主学習ノートの提出率の平均は90%以上に達した。	・個の実態を把握して、適切に指導・支援ができていて、生徒自らが自主的に質問したり、解決したりするような姿勢を育てる。	A	・長ければ、保育園入園前から中学校まで一貫して、人間関係が固定化しがちである。お互いのことがわかっているのはよいことだが、努力をあきらめている生徒もいるかもしれない。今後も、指導を続けてほしい。

③ 豊かな心の教育

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員の評価 (A～Dで記入)	意見や提言など
教育活動	●心の教育	道徳教育及び人権・同和教育の推進	全教職員で人権・同和教育に取り組み、生徒が豊かな人権意識と差別、人権問題についての正しい知識を身につけ、互いの人権を尊重して生活を送り、差別を無くしていく態度と力をのばしていく	・人権教室や人権学習集会の定期的開催。 ・生徒会人権宣言、人権標語等の作成を通して、生徒を主体とした人権尊重の取り組みの推進。 ・各学年毎の人権学習や部活動学習を通して確かな人権意識を育む。	A	・年間を通して全校で人権学習を行い、年3回の人権学習集会を生徒主体として行うと共に人権作文や標語に取り組み、人権の大切さについて学び、いじめや差別のない吉田中を自分たちでつくっていくとする意識を高めることができた。	・生徒自ら差別やいじめのない吉田中をつくり上げていこうとする態度と力を育むために、生徒会を中心とした人権集会を続けていく。 ・各クラスにおいて生徒、クラスの実態に即した人権学習の授業を学級担任で行っていく。	A	
		いじめ問題への対応	いじめの未然防止と早期発見	・意識調査で、生徒・保護者のいじめのない学校というプラス評価80%以上をめざす。	・アンケートを月1回実施し、情報を共有しながら予防的関わりや早期発見、早期対応に努め、教育相談を適宜行うこと。 ・Q-Uを実施し、生徒の学校生活の状況を個別に把握することで、要支援生徒に対して日常的な支援を行う。 ・保護者との連絡を密に行うなど、小さな情報を見逃さないよう家庭・地域・関係機関との連携を強化する。	A	・アンケートを毎月実施することができた。また、その情報や、日頃の学校生活における情報等を職員間での情報共有や連携を適宜行うことができた。 ・Q-Uを分析することで、個に応じた対応を共有・把握することができ、指導にあたることができた。 ・保護者からの情報提供から早期発見を行うことができ、対応することができた。	・更に家庭・地域等との連絡を密にすることや関係性の強化を図っていく。 ・職員、保護者、地域等からの情報を密に共有し、対応にあたっていく。 ・アンケート内容を生徒がより相談しやすくなるような内容に検討する。 ・教育相談担当やSC、SSWとの連携を強め、支援体制を強化していく。	A

④ 安全で安心な学校づくり

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員の評価 (A～Dで記入)	意見や提言など
教育活動	○個に応じた支援	一人一人のニーズに応じた特別支援教育・教育相談の充実	・全職員による生徒理解と個々に応じた支援体制の確立するために、毎月生徒理解の連絡会を持つ。 ・特別支援教育コーディネーターを中心に、家庭及び特別支援学校や専門機関との連携を図る。	・職員会議等で支援を要する生徒の共通理解を図り、全職員が対応できる環境をつくる。 ・特別支援委員会、ケース会議など必要に応じて開催し、早期の対応を図る。 ・巡回相談の活用、スクールカウンセラーとの積極的な連携を図る。	B	・職員会議等で支援を要する生徒について報告する時間を設定してもらい、職員で共通理解を生徒の支援にあたることができた。 ・気になる子のケース会議を職員全員でもつことができた。その後保護者と面談したが、知能検査の実施も含め来年度も引き続き支援にあたる必要がある。 ・今年度は巡回相談は実施しなかった。スクールカウンセラーとは担当職員が相談をするなどの連携を図ることができた。	・巡回相談を利用するなどして、特別支援学級の生徒の学習面の支援の在り方等について相談する機会をもつ。 ・支援を必要とする特別支援学級以外の生徒についても支援体制を整えていく。	B	
		●健康・体づくり	健康・安全教育の推進	・保健、給食、食育指導の充実を図り、自己管理能力を高める。 ・朝食喫食率を100%にする。 ・危機回避能力を高める避難(防犯)訓練や学習会、防災教室を企画実施する。	・個別の健康観察を実施し、基本的な生活習慣の改善を図る。 ・食育だよりの発行、内容充実を図る。 ・避難訓練等の際に防災教育を実施できるように担当者を中心に準備する。	B	・健康課題である「視力低下」についての保健指導は実施することができたが、食育指導については、保健指導に重点を置きすぎたため、充実が図れなかった。 ・防災教育については、担当者を中心に、講師招聘等をし、計画的に実施をすることができた。	・視力低下や食に対する意識は向上している。どちらも家庭の協力が必要なので、実態を知らせる等、家庭との連携をしながら、取組を行うようにする。 ・防災教育を継続して次年度も取り組む。	A

⑤ 業務改善・教職員の働き方改革の推進

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員の評価 (A～Dで記入)	意見や提言など
教育活動	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	衛生管理の改善、充実	・職員の業務改善に対する意識を高め、教諭等の時間外勤務時間を昨年比10%以上削減する。 ・年3回(6月、9月、12月)ストレスチェックを行い、働きやすい職場環境を目指す。	・業務記録表をもとに職員の時間外勤務時間を確実に把握するとともに、特定の職員に業務が集中しないようマネジメントを行う。 ・定期的なストレスチェックにより、職員の精神衛生面の変化を把握するとともに、常に職場環境の改善を図る。	A	・業務改善の意識が高まり、時間外勤務時間は、前年度比約22%減だった。 ・日頃から、お互い声を掛け合い、職場環境の改善と精神的ストレスの軽減を図った。ストレスチェックも行った。	・部活動の顧問をしている教師が、時間外勤務が多くなり、心身に疲れを感じているので、改善を図る必要がある。休日の練習や試合時間を見直し、複数顧問を有効に活用する。	A	・疲れている同僚がいたら、お互いに助け合うことが大事。自分の職場でも、それは気を付けて行ってる。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

①地域とともにある学校づくりについては、「つながりを大切に、未来を創造する[吉田学]の実践」というテーマで、ちゅうでん教育奨励賞に輝いた。志を高める教育は、これまでの地域と一体になった教育活動の実践と研究によるものである。また、国際交流・国際貢献については、多くの海外講師等を教育活動に取り入れ、視野の広さと体験的な活動ができた。②確かな学力は、全国・佐賀県学習状況調査の結果をみれば、大変良好である。しかし、これに甘んじることなく、新学習指導要領にそって「深い学び」を教師が探求してほしい。③豊かな心の教育については、道徳教育・人権・同和教育とともに、充実した教育活動が展開できた。いじめの早期発見・早期解決を図り、子供同士の交友関係がよくなった。④安全で安心な学校づくりは、ケース会議の内容を充実したり、専門機関を活用したりして、個のニーズに応じた支援ができた。大型連休後に負傷者が増加し、柔軟性等を高め、自己管理能力を向上させたい。食育では、2年連続、県の表彰を受け、家庭の協力と生徒自身の意識の向上が図られた。⑤の働き方改革では、行事の精選面で改善できた。また、部活動時間の軽減を図る必要がある。○次年度の取り組みとしては、深い学びについての研修を重ねるとともに、生徒たちが考えを伝えあい、学びをアウトプットできる力を向上させる。また、心身ともに健康で、どの生徒も学校生活を生き生きと過ごさせたい。